

佐賀市東名遺跡の年代とその問題点

松井 章 (奈良文化財研究所)

はじめに

佐賀市東名遺跡は縄文早期の集落、墓域、そして斜面上に点々と形成された6カ所の貝塚とその周辺に分布する貯蔵穴群からなる大規模な湿地遺跡で、これまでに400点以上の編みかご(バスケット)や木器が出土している。佐賀市教育委員会は、2007年1月現在、年度内発掘終了というプレッシャーの中、鋭意発掘中である。この遺跡の特徴は、急激な海水面の上昇により遺跡が放棄され、すみやかに水成粘土層が遺跡全体を覆ったため、通常の遺跡では残存しない有機遺物、特に編みかご、皿、掘り棒、杭、櫛などの木器が日本最古の出土例として重要な遺跡である。

遺跡の立地

東名遺跡は、有明海の現海岸線から約28キロ奥まる、背後に背振山地を控えた佐賀平野の中央部に立地する。国土交通省は佐賀平野の洪水対策として、この地に55ヘクタールにおよぶ台形状の貯水池の掘削を計画し、佐賀市教育委員会は1993年から1996年にかけて周知の遺跡であった東名遺跡を、2002年から2003年にかけて久富二本杉遺跡を発掘した。両遺跡とも縄文早期後葉の遺跡で、久富二本杉遺跡は二次堆積と思われる貝層を検出し、発掘区域外に大規模な集落の存在が予想され、東名遺跡では現地表下1メートルで、縄文早期後葉、塞ノ神B式を主体とする炉と考えられる167基におよぶ集石遺構と、最小個体数7個体のなかば腐朽した埋葬跡を検出し、発掘は終了した。

ところが、2002年2月、重機で遺跡周辺部を掘削中に貝塚が露出したと佐賀河川総合開発工事事務所から届け出があり、担当者、西田巖が現地を踏査したところ、集落域と同時期の5カ所の貝塚が存在し(その後、最大の第6貝塚が発見された)、しかも掘削された貝層には露出したままの編みかごが数点存在する塞ノ神B式土器の湿地性貝塚であることを知った。そこで佐賀市教委は国土交通省と協議し、第二次発掘調査を実施すること、発掘にあたって考古学、第四紀学の研究者を中心とする発掘指導委員会を発足させることで一致し、以来、その提言に従って発掘担当者を1名から2名に増員し、さらに嘱託調査員を採用し、民間会社に発掘の一部や測量、遺物取り上げなどを委託するなど、発掘体制を大幅に増強させて完掘に臨んでいる。

ボーリング調査によれば、発掘区の北西から南東にかけて現在の巨勢川にあたる埋没河川が存在し、そこに北から支流が流れ込む。六ヶ所の貝塚はいずれも南北に流れる旧河川の東側の微高地から、河川に向かって落ちる斜面上に形成されたものであるが、流路に対してやや引っ込んだ湾曲部に形成されているものが多い。その規模は、第1貝塚が長さ30m、面積300m²、第2貝塚は長さ40m、面積400m²。第2貝塚も北の上流部に突出部を持ち、その突出部の傾斜面や第2貝塚の内部や、その下方縁辺の粘土層に多くの貯蔵穴が存在し、その多くに編みかご、木器や板材、動物遺体が投棄されていた。東名遺跡はその支流の西岸に立地し、その斜面上に貝塚や貯蔵穴群が点々と形成されている。居住域や墓域は、現地表下1メートル前後、標高+3mであったが、貝塚および湿地貯蔵穴群は、地表下5-7m(標高-1-3m)に分布する。

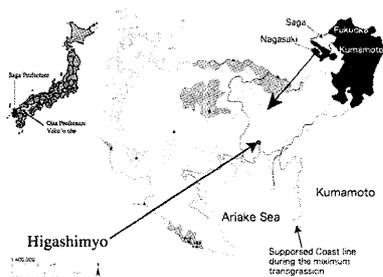


図1. 東名遺跡群の位置

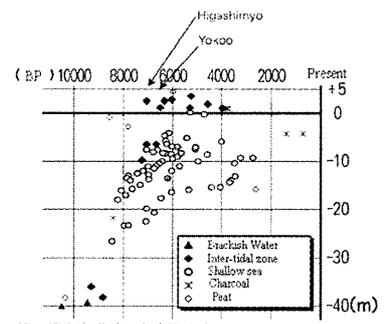
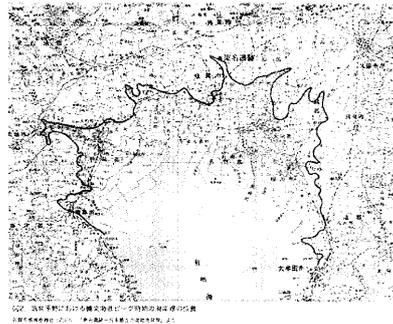


図3 縄文海進時の海水面変動

遺跡の年代

いずれの貝塚も早期後葉の塞ノ神B式が主体をなし、最上層でわずかに轟式が出土する。AMS 放射性炭素年代測定法によると、第2貝塚から出土した編みかごの材は、 $6976 \pm 36 \text{yrBP}$ (較正暦年代 5891~5790yr cal BC)を測る。7000BP頃から居住が始まり、縄文海進によって放棄を余儀なくされたもので、貝塚および貯蔵穴群は、海進のさなかに分厚い水成粘土層によって覆われ、二度と地表に露出しなかった結果、良好な状態で有機遺物が保存されたと考えられる。

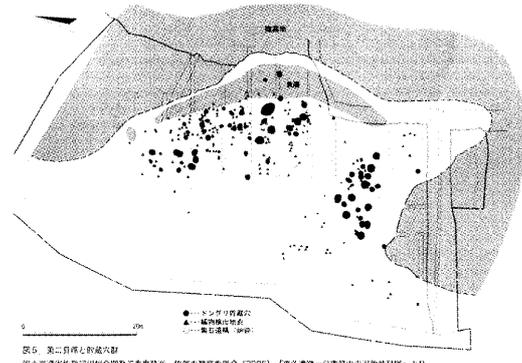
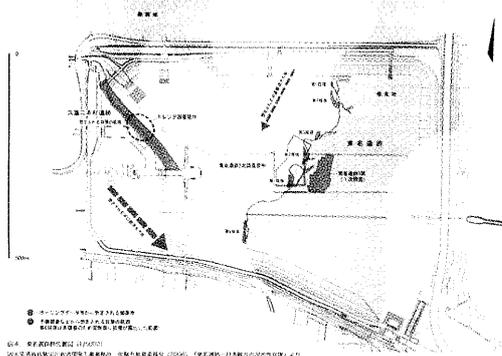
近年、中国の浙江省、河姆渡文化に属する田螺山遺跡、韓国飛鳳胆遺跡など、海進直前の遺跡が発掘されている。それぞれ現在は海岸から離れた内陸部であるが、大河の河口から遡った沖積地の湧水地帯に立地し、いままで予想もされていなかった木器や堅果類などの有機遺物が出土している。

遺物

骨角器の中には、鹿角の幹部の表面を磨き、裏面を掘り込んで板状に加工し、直径1mm前後の孔を数多く穿ち、幾何学文様を施す垂飾具が、4点以上出土している。個々の穴は、回転によって穿孔され、このような微細な孔をどのような道具で穿ったのか不明である。また、このような装飾意匠は、他の地域や後の時代にも見られず、その系譜は不明である。編みかごの製作にも使われたであろう鹿角やシカの中手骨、中足骨を素材とした刺突具も多数出土している。貝層の主体をなす貝類は、ヤマトシジミとハイガイで、さらにアゲマキ、カキ類が加わり、最上層には巨大なカキが平面的に散らばる。貝塚を形成しているにもかかわらず、魚骨は多くない。汽水域に侵入するボラ、スズキ、クロダイが代表的で、サメ類、トビエイ科かアカエイ科のエイ類、ハモ、ナマズなどが発掘時に採集されている。貝層の水洗選別によると、小形のハゼ科（ムツゴロウを含む）も出土しているが、やはり量は多くない。スッポンの出土は特筆されるだろう。縄文時代の遺跡での出土例は、琵琶湖周辺の遺跡に限られていたが、九州では本例が最初であろう。哺乳類はシカ、イノシシが多く、イヌ、カモシカ、カワウソ、タヌキなども出土しているがその量は多くなく、貝類に特化した貝塚と言えよう。

本遺跡の最大の特徴は、おびただしい編みかごの出土である。出土した編みかごは、第2貝塚だけでも250点を優に越える。2006年末には第1貝塚と併せて400点を越えた。その8割以上は、木本類の材を幅1cm程度に薄く割いたヒゴ(へぎ)を素材とし、網代編みともじり編みを組み合わせたもので、少数ではあるが、六つ目編みも存在し、蔓を素材としたものも見られる。網代編みの技法は、1本1単位、2本越え、2本潜り、1本送りが多いが、底部や湾曲部では自由に送ったり潜らせたりし、装飾のためか補強のためか、別の素材を織り込む例も見られ、すでに現代と変わらぬ高度な製作技術を持っていたことを示す。貯蔵穴からは樹皮を剥ぎ取ったものや蔓を巻いて束ねたもの、木本類をへぎ状に細く割り裂いて水に晒した編みかごの素材、草本類の繊維を縄で束ねたものなども出土している。

皿には円形のものや両端に取っ手を作り出したものがあり、削り痕が顕著である。掘り棒の可能性のある先を尖らせた木製品や杭も多数出土している。皿や板材は編みかごとともに日本最古例である。貯蔵穴は少なくとも80基以上を発掘し、そのうち50基前後から編みかご、木器が出土している。



遺構

第一次の発掘で、167基にもものぼる集石炉や、7体分の埋葬人骨を含む墓域が発掘されていたが、そこから数メートル降った埋没河川の河口近くに貝塚と貯蔵穴が分布していた。貯蔵穴の多くは平面が円形で、直径50cmから1m、深さは50cm内外が多く、素掘りである。貝塚の上面や中層から掘り込まれたものもあるが、大半は貝塚の縁辺やさらに下位に分布し、ケイ藻分析によれば河川の流れや潮の干満の影響下にあったことが明らかである。現在の有明海は、干満の差が6m以上と大きく、貝塚が形成されていた当ても、高潮位には貝塚部が水没することもあったと考えられる。

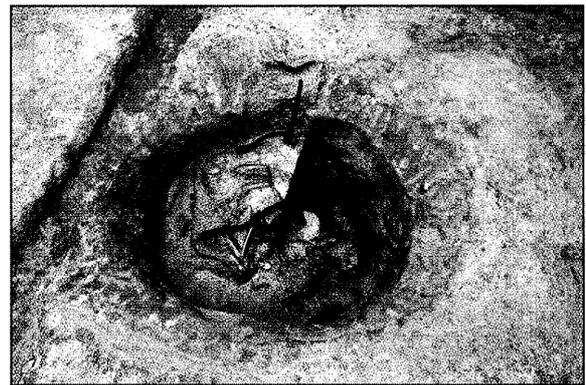


図6 貯蔵穴 SK2056

まとめ

本遺跡は、丘陵上の住居跡、墓域と、河川に向かう傾斜面に形成され、縄文海進によって埋没した6つの湿地性貝塚とその周囲の貯蔵穴群からなる大規模な縄文早期後葉の墓域、集落と生業域である、塞ノ神B式と、それに続く形式である轟A式の貝層をわずかに含む貝塚、およびその周辺の貯蔵穴群を擁す、大規模な集落跡である。

この遺跡の堆積状態から、汎世界的な地球温暖化によって海水面が急激に上昇し、大潮や高潮の際に低地の平原に海水が侵入し、やがてそれが満潮の際に普通に見られるようになり、さらに、この地での生活そのものを不可能にしたのであろう。人々がさらに上流に移住していった後は、現在の有明海にみるように、干満の差の激しい干潟が一面に広がり、その際にできた粘土層は、普通の乾燥地の遺跡では残らない植物性遺

物を数多く保存する役割を果たした。

これまで、われわれは旧石器時代から縄文草創期への技術革新、そして1万年を越える縄文時代を通じての文化や生活技術の進歩を信じて、その右肩上がりの発展を明らかにしようとしてきた。しかし、東名遺跡で見られるように、縄文人は縄文早期から現代と変わらない編みかごの製作技術を持っていたということは、われわれの予想外のことであった。この海進がピークに近づきつつある時期の中国、韓国、日本という東アジア全体での環境変動を、水辺の湿地遺跡は、他のいかなる時代よりも情報を豊富に遺している。こうした東アジア全体での海進直前期の先史文化の比較研究こそ、現在、行うべきと考える。なお、第3-第6貝塚は、露出した貝層をこれ以上掘削する必要がないため、現地保存することが可能となった。しかし潟水期には貝層が露出し、増水期には水没するという、有機遺物の保存には最悪の環境となるため、現在、土木工学、地質学と文化財の専門家からなる東名遺跡保存対策検討委員会を設置し、地下の埋蔵環境の保全をはかるため、地下の有機遺物に水分を絶やさない土盛り等の保存対策を議論しているところである。

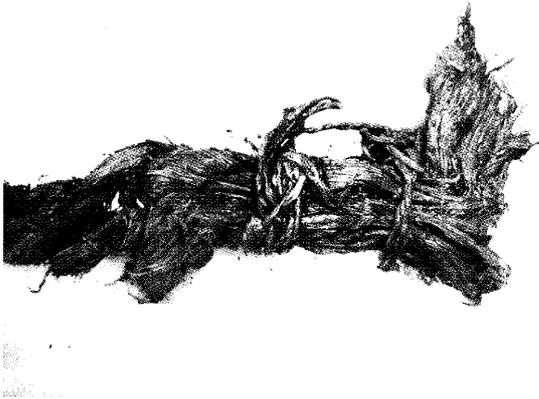


図7 縄



図8 櫛

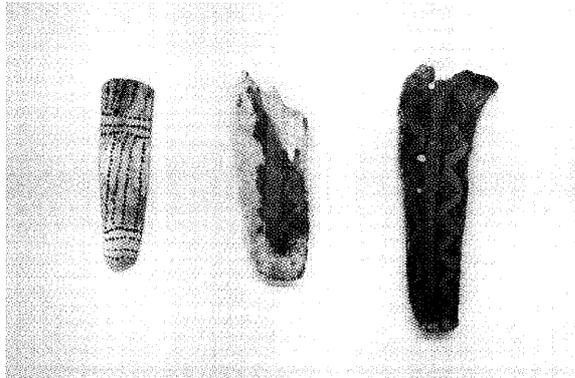


図9 鹿角製装身具

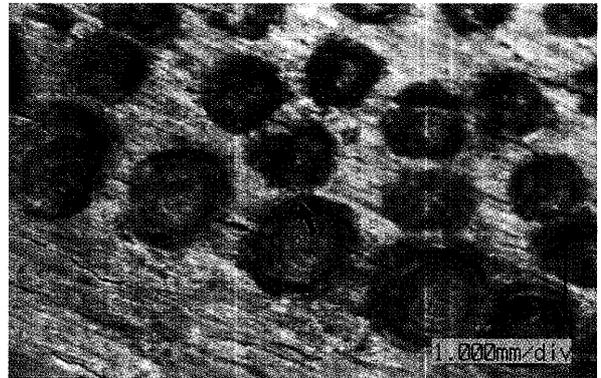


図10 鹿角表面の回転による穿孔

本文は、調査員、調査指導委員ら4名の連名で発表した出版物をもとにし、松井の責任で改変した。
西田巖・中野充・甲元眞之・松井章(文責)「佐賀県佐賀市東名遺跡」『考古学研究』53-1、考古学研究会、pp. 104-06、2006。

The excavation of the wetland site of Higashimyo, Saga Prefecture and its dating

Matsui Akira

(National Research Institute for Cultural Properties, Nara)

I am taking part in the excavation of Higashimyo site that is the wetland shellmiddens in Saga Prefecture, Kyushu Island since 2003. It was 7-8 meters below the modern ground surface and -0.5 meters below the sea level at the lowest part. It is located 28 km from the Coast of Ariake Sea. Saga Municipal Government revealed the alluvial plain as wide as 500,000 square meters for digging a reservoir and found 6 shellmiddens along the former river bank slope. There have been found more than 400 baskets or woven bags in the shellmidden No. 2, where only 30 % has been excavated. AMS dating indicates that they were 7040 ± 130 BP.(Cal.) from charcoal and 6976 ± 36 bp.(Cal. BC 5891-5790) from the basket's fragment. All six shellmiddens contain the same type of the late Initial Jomon phase in Kyushu, that is Senokan-shiki (type) pottery and only upper layers contain Todoroki B-shiki. It will be measured that the actual absolute period of a type of Jomon pottery according to the results of the dating between the bottom layer and the upper layer that contain Senokan-shiki by AMS dating. The surface of these shellmiddens was covered with fine clay that was formed by tidal and river sedimentation. Owing to the Jomon Transgression and retreatment of the sea, which occurred eustatic event at that time, this site had been buried in the alluvial plain. This event makes it easy to compare this Initial Jomon site with other sites in other Japan islands or even Eastern Asia on the same horizon. That is the reason why so many plant remains have been preserved in good condition.